

『ブライズデール・ロマンス』における

仮面の意味 (1)

——ゼノビアの仮面——

上 田 み どり

1. 序

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne [1804-1864]) は、第二作目の長編小説『ブライズデール・ロマンス』(*The Blithedale Romance* [1852]) を世に出すにあたって、その序文で、この作品の作者の関心は “to establish a theatre, a little removed from the highway of ordinary travel....” (p. 2) にあり、登場人物には、“phantasmagorical antics” を演じるように描いた⁽¹⁾ということを述べている。この作品の物語が演劇的舞台として想定されていることは、語り手カヴァーデール (Coverdale) にブライズデールの農場を “my private theatre” と呼ばせたり (p. 7)、農場の住人をシェークスピアの作品『ヘンリー 4 世』(1598) の劇中

(1) *The Blithedale Romance* のテキストは、The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne III (Ohio: Ohio State University Press. 1964) を使用した。

『ブライズデール・ロマンス』からの引用は、すべてこの版からであり、引用に続けて括弧内にページ数を示す。

(2) *Henry IV* Shakespeare の史劇。初演は1598年。第1部は諸貴族と結んだ Percy 一家の謀反を扱ったもの。肥大漢 Falstaff は作者が創造した最も有名な人物の一人。第2部は Scroop 大司教, Lord Morebray, Lord Hastings の謀反, Henry IV の病死, Henry V の即位を扱ったもの。

人物にたとえたりしている (p. 64) ことで示されている。しかし、単にそれだけではなく、この小説の第13章「ゼノビアの逸話」では謎のヴェールの貴婦人の話をゼノビア (Zenobia) の一人芝居で成り立たせ、第22章「フォントロイ」は物語りの謎解きをしながら進展していく劇中劇ともなっている。またヴェールの貴婦人のショーが催された「村の公会堂」(第23章)や「エリオットの説教壇」(第14章)は、登場人物が役者として、公会堂や説教壇は劇場として扱われているというふうに、作品の構成を通じて、演劇性が強調されている。さらにこの作品に登場する人物は本名を用いず、比喩的な意味でそれぞれマスク、あるいはヴェールをつけて役を演じる。そして、第24章「仮面舞踏会」では、実際に仮面をかぶっていた登場人物が、仮面をはいで真の姿にもどることで作品は終る。従って、この作品を理解し、ホーソーンの小説の特質を解釈する上で、作品の仮面劇としての性格に注目し、それぞれの人物のかぶる仮面の意味を考えることが重要であろう。さらにまた、ホーソーン的第一番目の作品『緋文字』(*The Scarlet Letter* [1850])においても、処刑台の場面の効果的な使用とかアレゴリカルな登場人物の配置などを考えてみると、作品を芝居仕立てで展開していくことに関心があったとみることもできるし、登場人物が比喩的にそれぞれの仮面を被ったドラマとも解釈できるので、この『プライズデール・ロマンス』も劇としてみた場合、作品の特質がより明らかにされるのではないと思われる。

さて、この作品の主たる登場人物としては、カヴァーデール、ゼノビア、プリシラ (Pricilla), ホリングズワース (Hollingsworth) があげられる。彼ら4人はみな何らかの意味で仮面をつけてはいるのだが、以下拙論においては、この四人の中でも特に大きな役割を担うゼノビアに焦点を当て、彼女の仮面の意味を考察してみたい。

2. ゼノビアの仮面

女性主人公の一人、ゼノビアの名前は実名ではない。第1章の初めにムー

ディ老人 (Moodie) の言葉として, “Zenobia...is merely her public name; a sort of mask in which she comes before the world, retaining all the privileges of privacy...” (p. 8) と語り手のカヴァーデールは紹介している。ゼノビアという名前は古代パルミラの女王名からとられており, オリエント文明の色彩濃い雰囲気と謎を醸し出す助けとなっているのは言うまでもない。この異国情緒に満ちた名前は, ただその異国性を強調するだけではなく, 彼女の黒い髪からも象徴されるように悲劇の女王を暗示している。また, ゼノビアの髪についての描写は, ホーソーンの第一作『緋文字』(1851) のヘスター (Hester) と同じように, 黒さと豊かさによってゼノビアという人物像の豊かさと複雑さを暗示している。その上, この髪には, 「若いブラウン君」の妻フェイス (Faith) のピンクのリボンの異質性と同じような効果を与える生花が飾られている。この花は, ブライズデールという共産主義的な共同体の中では受け入れられるはずのない異教の香り, 熱帯の豊穡を視覚化したものであり, そこには, F. C. クルーズ (Frederick C. Crews) が指摘しているようにカヴァーデールに代表される一般的理性には受け入れられないだろうと思われる性的雰囲気がある。

The significant fact...is that he (Coverdale) can scarcely accept the blatantly obvious fact of her sexual experience, but must dwell on the question with prurient concern...⁽⁴⁾

結局彼女のかぶっているダイヤモンドのように輝く生花の冠は, 永くこの共同体に受け入れられるはずのない, 短命な女王になることを暗示してい

(3) “Young Goodman Brown” (1835) はホーソーンの短編中最も傑作と言われる作品。主人公のブラウンが, 結婚後まもなくある集会にでかけることを妻に告げ, 森で妻フェイスのピンクのリボンが空から落ちてくるのを見る。善悪の価値判断が逆転するような悪夢的な経験をし, 主人公は猜疑心にさいなまれて一生を送る。

(4) Frederick C. Crews, *The Blithedale Romance* A Norton Critical Edition (New York London: W. W. Norton & Company, 1965, 1978) p. 378.

る。リチャード・チェイス (Richard Chase) が、ゼノビアの特質を、“a novelist’s success in her faultful and appealing humanity...” と捉え、彼女を “the tragicomic heroine” とみなしているのも、こうした暗示を理解してのことであろう。⁽⁵⁾

このように、ゼノビアには悲劇的性格が、初めから付与されているが、この性格には、喜劇性がからめられていて、感傷的になることを防いでいる。しかもこの喜劇性は、しばしば共同社会の慣習や秩序を攪乱する役割を果たし、彼女を死という最終的悲劇へと駆り立てる。⁽⁶⁾例えば、第六章で、風邪をひいたカヴァーデールを看病するゼノビアは次の様に描かれている。

She was among a thousand other things that she might have been for a stump-oratress. I recognized no severe culture in Zenobia; her mind was full of weeds. It startled me, sometimes, in my state of moral, as well as bodily faint-heartedness, to observe the hardihood of her philosophy; she made no scruple of oversetting all human institutions, and scattering them as with a breeze from her fan. (p. 44)

リベラル派の演説家で影響力もある女性活動家でありながら、病人に粥を食べさせるといった家庭的伝統的な女性像の一面を覗かせるゼノビアに、カヴァーデールは驚かされている。そして、その相矛盾する資質を観察して、知的活動の源となるはずの文化的背景の代わりに、素朴な雑草が詰まっていると見なしたり、あまりに先鋭的でとても不可能と思われる社会改革を、扇で吹き飛ばすように軽くあしらっているゼノビアの様子を描写する。この描写は、素朴故に、活力を持っはいるが、現実の問題に本質的に直面

(5) Richard Chase, *American Literature and Its Tradition* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1957, 1983) p. 83.

(6) *ibid*, p. 84.

し対決できるだけの支えが欠けているゼノビアの資質に、カヴァーデールが気付いている事を示唆してはいる。しかし描写全体に軽い滑稽味が交えられているため、批判の調子はむしろ弱まり、彼女を批判の対象として描くのではなく、彼女の「道化」のような仕草を通して、社会の批判をさせることが目的であるように感じられる。つまり、ゼノビアがここで果たしている役目は、社会の悪の是正を促す「道化」、すなわち、「知的道化」の役であると理解してよいだろう。

本来、文学作品に「道化」が盛んに現われるようになったのは中世以後のことで、ルネッサンス期の時代相を映し出す典型として、その役割は「賢」と「愚」の価値観を覆す社会の異端者ということであった。そして、このような道化は、最後には共同体の「法」により、あるいは共同体の（ここではブライズデールとみなされる）罪を一身に背負い、追放される運命にある。⁽⁷⁾ゼノビアが「幸福の谷」（ブライズデール）の共同体の出資者であり、「賢者」としての面を持ちながら、彼女が好意を寄せるパートナーのホリングズワースに騙され、最後には彼の率いる社会から追放の身となる「愚か者」の面を合わせ持つこともまた、この中世の「知的道化」の役割を示唆しており、社会の覚醒役としてのゼノビアの役割は明かであると思われる。

ところで、ゼノビアは共同社会の是正を意図する役割を負っておりながら、「知的道化」以上のものになれず、最終的に、破滅においやられている。⁽⁸⁾このような限界は、彼女が女性革命家やフーリエ主義実践家、という⁽⁹⁾

(7) 高橋康也、『道化の文学』（中央新書、1977、1989）p. 83.

(8) 当時としては、マーガレット・フラー (Margaret Sarah Fuller [1819-50]) が America の女流批評家、女権拡張論者として有名。彼女も帰国の途中、船が難破し夫、幼児と共に溺死するという悲劇的生涯を送ったとされる。

(9) 共産主義的実験農場を目指して1841年に発足したブルック・ファームに1844年頃からこのフランスのC. フーリエ (1772-1837) の提唱した社会主義的生活共同体の理想的構想が取り入れられたようである。西前孝氏解説、『ブライズデール・ロマンス』（八潮出版社、1985）p. 265.

新しい理想の仮面を次々とつけてゆかなければならなかったことと関係があるだろう。ブライズデールという特殊で狭量な社会に向けた仮面をつけたゼノビアは、距離を保って世界をながめることはできたが、外向けの仮面は意識しながら演じなければならず、仮面をはずすと内面の弱さがでる。博愛主義に心を傾ける一女性の素顔は見せないで、ブライズデールの女王、女権運動家、莫大な遺産相続人として、プリシラの姉として、高い理想を掲げ、全幅の信頼をホリングズワースにおいてるように見える反面で、理想の仮面を次々とかけ換えねばならなかったゼノビアは、本質的には、自分のつけている仮面を信頼してはいないし、仮面をはずした自己にも満足していない。

このようなゼノビアのような欠陥は、理想を追い続けることを是認しながらも、すでに形成されていた社会の拘束から抜け出せないアメリカ人の、更には人間一般の普遍的問題であるのかも知れない。というのも19世紀のアメリカ演劇がピューリタニズムの良風美俗的な考えに縛られたものであることに反抗し、革新的な作品を多く書き続けたユージン・オニール (Eugene Gladstone O'Neill [1888-1953]) でさえも、遺伝的・宿命的な暗い血筋の呪いから抜け切れ⁽¹⁰⁾ない *The Great God Brown* (1926) という仮面劇を描き、ゼノビアに類似したマーガレット (Margaret) という女性を登場させて、社会に本来の自己を隠して生きて行かねばならない不安と絶望の姿を描⁽¹¹⁾いているからである。

3. 結 論

ゼノビアは博愛主義者の仮面をつけたホリングズワースの愛を獲得することもできないし、ブライズデールという現実を無視した理想郷にうちこむこともできず、仮面をはいた自己を意識した時、高い誇りばかりで、何も成就できない己に絶望せざるを得なかった。このようなゼノビアの生

(10) 鳴海弘『オニール』20世紀英米文学案内14 (研究社, 1968) p. 7.

(11) Eugene Gladstone O'Neill, *The Great God Brown* (1926)

き方をチェイスは次の様に述べている。

The point about Zenobia is the waste and confusion of her inner life, which result from her always living according to this or that literary or political idea rather than according to the natural urgencies of her being.⁽¹²⁾

チェイスの指摘するように、ゼノビアは暖炉のそばの “a certain warm and rich chatacteristic” (p. 17) といった暖かい情感を備えているにもかかわらず、彼女の存在が “caused our heroic enterprise to show like an illusion, a masquerade, a pastoral, a counterfeit Arcadia...” といった効果 (p. 20) を生み出す文学的仮面、あるいは “a stump-oratress” (p. 41) とか女性革命家、フリーエ主義実践家という政治的仮面に引き付けられてゆくが、確固とした信念がないためにそのどの仮面にもすんなりと安住できないのである。また、レオ・レヴィ (Leo Levi) は彼女を, “a victim of the conflict between urban and rural possibilities, neither of which permitted her to know or to judge correctly her own feelings⁽¹³⁾” の様に捉えている。このことは、カヴァーデールが町のホテルの一室からゼノビアを垣間見た時に、彼女が “something like the illusion which a great actress flings around her” (p. 152) といった演技者として知的に洗練された雰囲気を持つという点で合理性を表わす都会 (町) 的可能性と、またブライズデールという農場の素朴な生活を送るという点で、田舎の (牧歌的) 可能性をさぐってもいるが、彼女はそのどちらにおいても成功していないと解釈できる。

結局彼女は次から次へ目先の変ったものととびついていくのだが、そ

(12) Richard Chase, p. 83.

(13) Leo B. Levy, *The Blithedale Romance* A Norton Critical Edition (New York London: W. W. Norton Company, 1965, 1978) p. 318.

れは、現実と理想を調整しきれない人間の破滅への道程である。高い理想を持っているが故にそれを実現する人間であるはずの人物にこのような道をたどらせるところに、ホーソーンの悲劇的現実感が窺えるように思われる。

『ブライズデル・ロマンス』の他の主要人物たちのそれぞれの仮面のドラマについては、稿を改めて詳しく論じるつもりである。